

# 『蒙古字韻』の牀母三等字について<sup>1</sup>

平田昌司

(無所属)

林英津 1985 は、『集韻』(1039年)の反切が中古牀母三等と中古禪母三等との区別を保とうと意図しながら完全には区別できておらず、牀三・禪三の混同が北宋の言語で既に起きていたことがその原因だと指摘する(pp. 196-205)。

牀三・禪三および澄母の合流の有無は、たしかになかなか整理しにくい。下の表1は主な韻書等が上声語韻と去声御韻の牀三・禪三小韻に加えた反切の一覧である。わざわざこの部分を取りあげたのは、水谷誠 2004 の第1章が指摘した、北宋の英宗の諱“曙”にかかわるからである。そこで明確に指摘されたとおり、真福寺本『礼部韻略』巻末の「元祐庚午礼部統降韻略条例」(元祐庚午は五年)は、諱字“曙”を避けるため、去声の常恕切のみならず上声の神與切まで対象としていた。これが神與切=常恕切の同音を示すなら、牀三・禪三の合流、全濁上声(神與切)の去声化の両方を前提とする。

表1	上声 語韻			去声 御韻 <sup>2</sup>		去声 遇韻
	澄 佇	牀三紆	禪三豎	澄 箸	禪三署	禪三樹
沢存堂本広韻	直呂切	神與切	承與切	遲倨切	常恕切	常句切
巾箱本広韻	直呂切	神與切	承與切	遲倨切	常恕切	常句切
五音集韻	直呂切	神與切	承與切	遲倨切	常恕切	常句切
沢存堂本大広益会玉篇	除呂切	神旅切 <sup>3</sup>	食與切	除庶切	常恕切	時注切
四声篇海	除呂切	神與切	石預切	除庶切	常恕切	時注切
新刊韻略	直呂切	神與切	承與切	遲倨切	常恕切	常句切
北京図書館本集韻	丈呂切	上與切	上與切	遲據切	常恕切	殊遇切
類篇	丈呂切	上與切	上與切	遲據切	常恕切	殊遇切
英宗趙曙の御諱					曙	
真福寺本礼部韻略	直呂切	神與切	承與切	(去声の部分进行欠く)		
淳熙重修文書式	直呂切	/	/	/	常恕切	殊遇切 <sup>4</sup>
附积文礼部韻略	直呂切	神與切	承與切	遲據切	(無字)	(無字)
増韻	直呂切	神與切	承與切	遲據切	(無字)	(無字)
古今韻会挙要	丈呂切=神與切		上與切	遲據切	常恕切	殊遇切
七音三十六母通攷	澄舉		禪舉	澄據	禪據	禪據
蒙古字韻(沈鍾偉 2015)	dzy 上	dzy 上	zy 上	dzy 去	zy 去	zy 去

<sup>1</sup> 本稿の牀母(床母)三等は『方言調査字表』の船母を、禪母三等は同じく常母をさす。

<sup>2</sup> 『韻鏡』『七音略』では、御韻に牀三字はない。

<sup>3</sup> “杼”の反切を用いた。

<sup>4</sup> 諱字“曙”について、「淳熙重修文書式」で常恕切と殊遇切が避けられているのは、この2小韻が実質的に同音になっていたことをうかがわせる。

覆元泰定本広韻	直呂切	神呂切	神與切	遲偃切	常恕切	常句切
洪武正韻	直呂切	直呂切	承與切	治據切	殊遇切	殊遇切

南宋紹興年間に作られた毛晃増韻は、“墅，承與切”で“又常恕切係廟諱嫌名，上聲不當迴避”、“紆，神與切”で“又常恕切係廟諱嫌名，其餘不當迴避”と注記している。

“常恕切”と同音になる字を避けようとするあまり、過度に自己規制するあまり承與切や神與切の字まで避けるのはゆきすぎだという判断が、毛晃以前になされたことを示している。現実の口頭の言語では、神與切—承與切—常恕切が区別できなくなっていたとしよう。その場合でも、本来の四声の所属が上声と去声とで別だったら、その字は回避の対象にはならない。“上聲不當迴避”は、この意味を示している。

表1から明らかなように、牀三と禪三との合流の根拠になりうるのは『集韻』『類篇』である。『集韻』はこの二声母字の小韻そのものまで合併させている(表2)<sup>5</sup>。『集韻』や『類篇』が牀三・禪三を上與切でまとめているのが北宋仁宗期の形態そのままだと仮定するなら、諱字“曙”と関係した処理ではなくなる。直接『集韻』に基づいて編まれた『礼部韻略』は、現在見られないことになる。それとも、逆に、現存する『集韻』『類篇』は、“曙”が諱字となって以降に、手を加えられ修正されてしまったのか。

表2

北京図書館本集韻	上與切	墅野野紆杼茅杼桃	
真福寺本礼部韻略	承與切	墅	神與切 紆杼
天理本毛晃増韻	承與切	墅野	神與切 紆杼桃
古今韻会挙要	上與切	墅野杼茅桃	神與切 紆

牀三と禪三と澄母の関係は、黄公紹・熊忠『古今韻会挙要』(1297年熊忠序)字母韻(以下、字母韻と略する)や『蒙古字韻』(1308年朱伯顔校正本)に至って、さらにむずかしくなる。表1によれば、この両書は、上声で澄・牀三小韻が同音だとし、牀三と禪三とを区別していた。従来から、『古今韻会挙要』字母韻と『蒙古字韻』との声母体系が近似し、ともに知母=照母、徹母=穿母、澄母=牀母という合流が起きていると指摘されているとおりである。

しかし、細部を検討してみると、吉池孝一 2008 が指摘したように、去声震韻“順”を『蒙古字韻』は牀三、字母韻は禪三としており、声母の扱いが両者で異なる<sup>6</sup>。字母韻は、澄牀母合流という原則から外れた資料を参照していたことになる。下に“順”以外の牀母三等字と澄母字の字母韻における合流状況について、「牀三=澄」の形式で例示する(\*は対応する澄母字がない例)。「蒙 A11a8」等は沈鍾偉 2015 による『蒙古字韻』の巻・行番号。下線は現代の普通話で破擦音となっている牀母三等字。

<sup>5</sup> 表1で覆元泰定本『広韻』が牀三・禪三ともに反切上字“神”を用い、異声母で同韻同等の小韻を反切下字だけで区別するのは特異である。

<sup>6</sup> 龍宇純『韻鏡校注』の指摘を敷衍すれば、韻書・韻図で“順”を牀三とするのは『広韻』『新刊韻略』『附積文互註礼部韻略』『毛晃増韻』『四声等子』『切韻指掌図』『切韻指南』系、禪三とするのは『集韻』『韻鏡』『七音略』『皇極経世起数訣』系。

- 〔平声〕唇 = \* (蒙 B4b1)  
 神 = 陳塵 (蒙 B2a3)  
 船 = 椽傳 (蒙 B11a8)  
 蛇 = \* (蒙原缺)  
 繩澗乘脞 = 呈程 (蒙 A11a8)
- 〔上声〕舐舐 = \* (蒙 A19b2)  
 紆 = 宁佇苧柱 (蒙 A29b6)  
 甚 = \* (蒙 B24a7)
- 〔去声〕示諡 = 緻穉遲治植置禡彘禡 (蒙 A19b3)  
 射闍 = \* (蒙原缺)  
 乘嵯剩 = 鄭 (蒙 A11a8)
- 〔入声〕贖術述 = 逐朮軸舳 (蒙 A29b7-8)  
 實射食蝕 = 秩帙姪擲直蝕 (蒙 A19b3-4)  
 舌折 = 轍徹澈撤 (蒙原缺)

字母韻の例の大部分は『蒙古字韻』にもそのままあてはまるが、“舐舐”は字母韻と『蒙古字韻』で明確に扱いが異なる。すなわち字母韻では“順”同様に牀三＝禪三なのに、『蒙古字韻』は牀三＝澄としている。

字母韻： 舐舐 = 是視市 (禪己) ≠ 豸禡雉 (澄己)  
 蒙古字韻： 舐舐 = 豸禡雉 (蒙 A19b2) ≠ 是視市 (蒙 A21a3)

元代の北曲韻書『中原音韻』、遠藤光暁 2016 が整理した元代ペルシャ資料、あるいは現代中国語方言の字音において、牀三と澄の合流は“脞船乘脞”のような一部の平声字に限られる。宋元代の共通語的方言で牀三＝澄の全面的な合流が起き、それを直接記述するかたちで『蒙古字韻』や字母韻の声母体系が定められたとは考えにくい。

参考文献：

- 遠藤光暁 2016. 『元代音研究—『脈訣』ペルシャ語訳による』。東京：汲古書院。  
 林英津 1985. 《集韻之體例及音韻系統中的幾個問題》，博士学位論文，台北：台灣大學中國文學研究所。  
 水谷誠 2004. 『『集韻』系韻書の研究』。東京：白帝社。  
 沈鍾偉 2015. 《蒙古字韻集校》。北京：中華書局。  
 高橋文治 2011. 『モンゴル時代道教文書の研究』。東京：汲古書院。  
 吉池孝一 2008. 「蒙古字韻の校訂と増補について」、『KOTONOHA』70。